

人文組織工学 A基礎理論

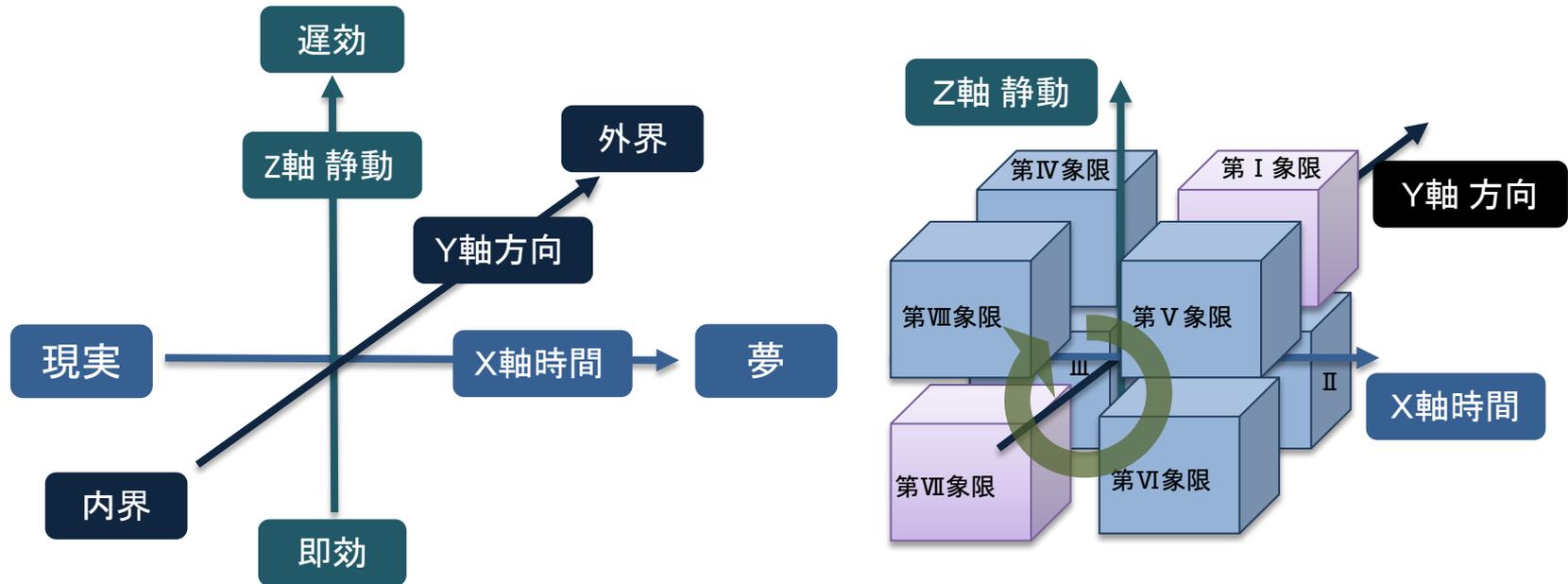
目的形成について



有効な目的形成の方向

目的形成は、目的を定めると、目的に向かっての行動の2つがある。動的構造としてとらえる。

目的設定時と目的遂行時に設定されている目的の位置を確認する。第Iが継続性と目的効果の高い位置を示す。



目的は対比するものがある。現在、相手、目的の対象などがある。この対比すべき概念があって成立する(対比概念)。

目的は未来における成果である。成果は誰もがなしえるものではなく、自らにおいて偉業であるとする。誰もがなしえる目的の結果であっても、その是非は問題外である。

目的形成の軸

変わらぬ目的、少なくとも継続できる目的を自覚して継続した活動が可能になる。

活動成果は、組織内や自身の中には現れない。活動は今ではなく未来に向かう。

X軸

夢と現実

Y軸

外界と内界

Z軸

遅効と即効

第Ⅰ象限：発展進化する《夢・外界・遅効とする期待実行空間》

何を成すかは考え抜かねばならない。常に考えねばならない。知識の成長と経験の広がり期待するモノが変わる。だからすぐに答えはでてこない。すぐに出てくる「期待」はすぐに消える。夢としたのは実現したい夢であり、期待である。夢を自身の中に築けば空想になってしまう。外に向かう目的ができて行動になる。

第Ⅶ象限：後退の可能性がます。《現実・内界・即効する閉塞空間》

組織で、実際に起こっている問題に対し、組織内に向かって、即効を期待し行動を起こせば、その場限りの問題解決になる。問題の解決は必要であるが、如何に、どのように、どこに向かって解決するかが問題となる。

「組織内障壁がある」のは、内界に向かっている箇所が存在証明である。組織内情報流、知識流も外に向かわねばならない。資源は組織外にある。人材、知識、資金、すべて組織外にある。公開と守秘とのバランスが大切になる。組織の卓越は、資源を外に向かって最大、最適に活用する方法である。

意識の位置と目的形成

目的実現と目的に向かう行動にはバランスが必要である。



ミッションと仕事を中心にした目的形成

自らの立場と生活を中心にした目的形成

目的形成には時間軸が並列する

昔から続く時間

昨日からの時間

明日へ続く現在の時間

安定・安全・平和を願う生活のための目的形成

発展変革を進める目的形成

生活ステージ

安定・安全・平和のために変化を享受する。

同じステージでは
矛盾が発生する。

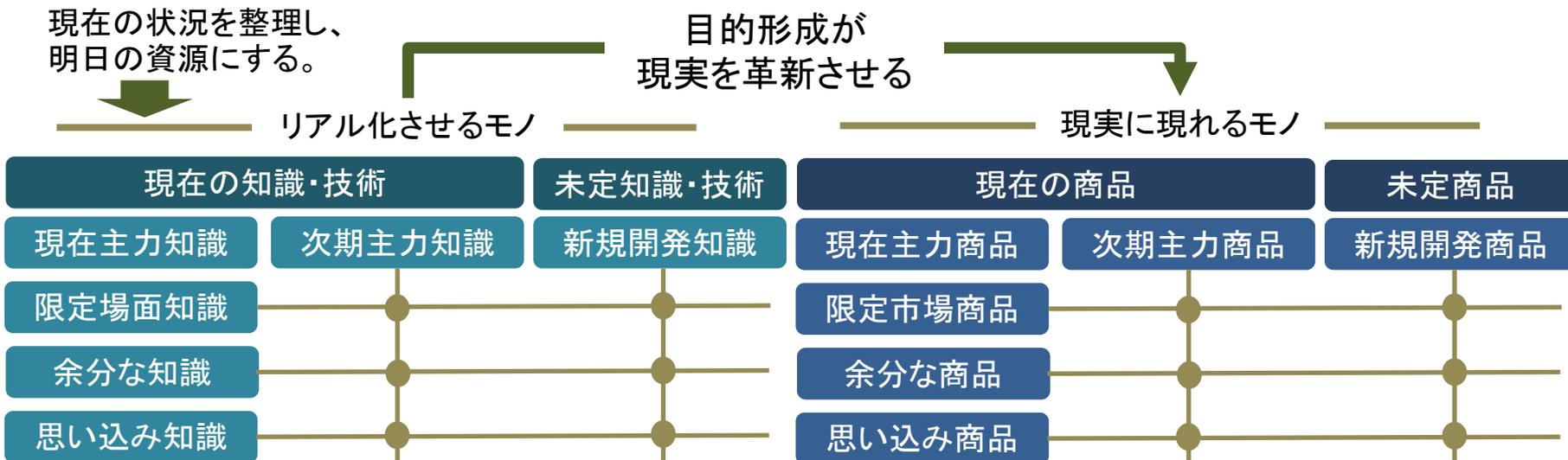
仕事ステージ

社会に対する目的形成

知識技術と実現化行動



現在の主力知識と技術は現在にあるが、次期主力商品、新規開発商品に向かう。



ミッションに向かって

社会に変化を作り出そうとする試みである。

常に先頭を走れ

二番手以下で良いと思えば、三番手にも付けない。三番手以下になれば、常に先頭を行く者の意志に従うしかない。先頭を走る者が、社会、市場を確定してしまうからである。精度も機能も、コストも決められてしまう。そうなれば、先頭を走る者にすぎるしかない。

自らの分野の活用範囲を切り開け

自らの分野の活用拡大を目指す。知識は知識に影響する。1つの知識が異なる他の知識を変える。知識が市場を変える。現在使われている分野だけが、真の分野であるとは誰も断定できない。もっと有効活用ができる分野があるかもしれない。知り得る限りの分野で試してみることを面倒がってはならない。

常識・通念から逃れよ

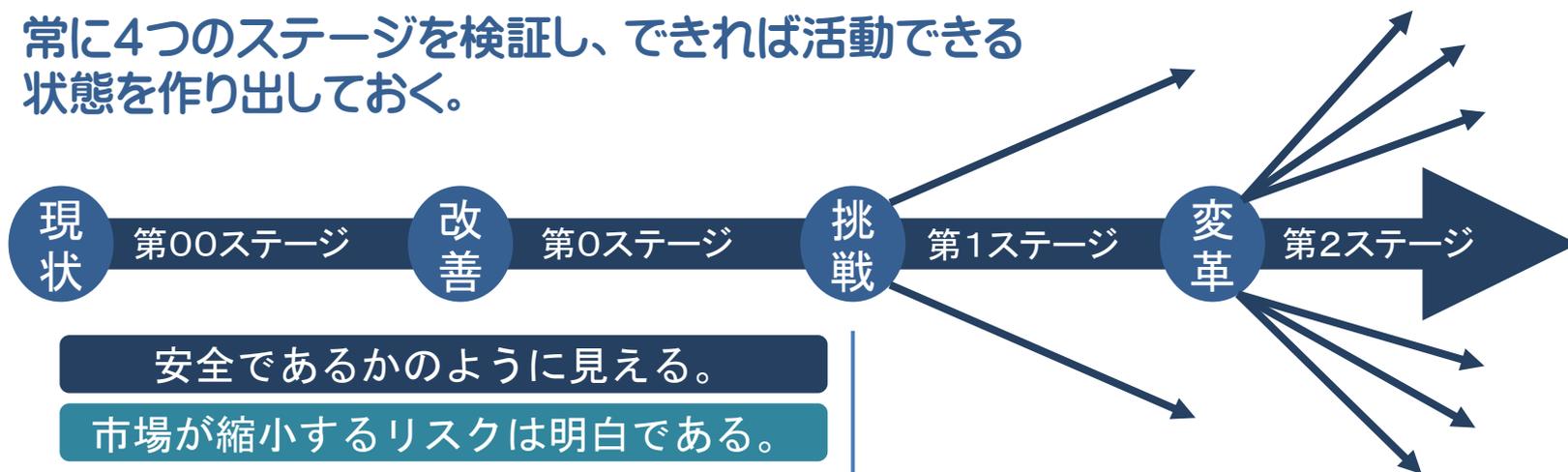
常識、通念に囚われてはいけない。常識、通念は、多くの人が同意し、多くの人が続けている。ずっと昔から続いている。変化の時代にあって、常識、通念は古代のものでしかない。常識、通念を否定するのではない。最適であるか、これ以外に他はないのか、を十分に検証しなければならない。さらに常識、通念を超えようとしなければならない。

自らの生産性を最適化せよ

生産は物だけではなく、知識、技術、市場、情報、流通、概念などがある。自らの生産物は何であって、その生産はどこに向けて、如何なる効用を果たすのかを徹底して突き詰めよ。さらに、最適化した生産の意味を求めよ。

未来に向かっての作業

常に4つのステージを検証し、できれば活動できる状態を作り出しておく。



安全であるかのように見える。

市場が縮小するリスクは明白である。

社会のどこを、
どのように
見るか。

現在の要因で、未来まで続くモノは何か。自らの資産で原則となっているモノは何か。

改善結果は、現状を元の状態に戻すだけではないかを確認する。可能性を広げる、新しく確立するところは何か。

活動範囲が広がる。
活動方向が複数に存在する。

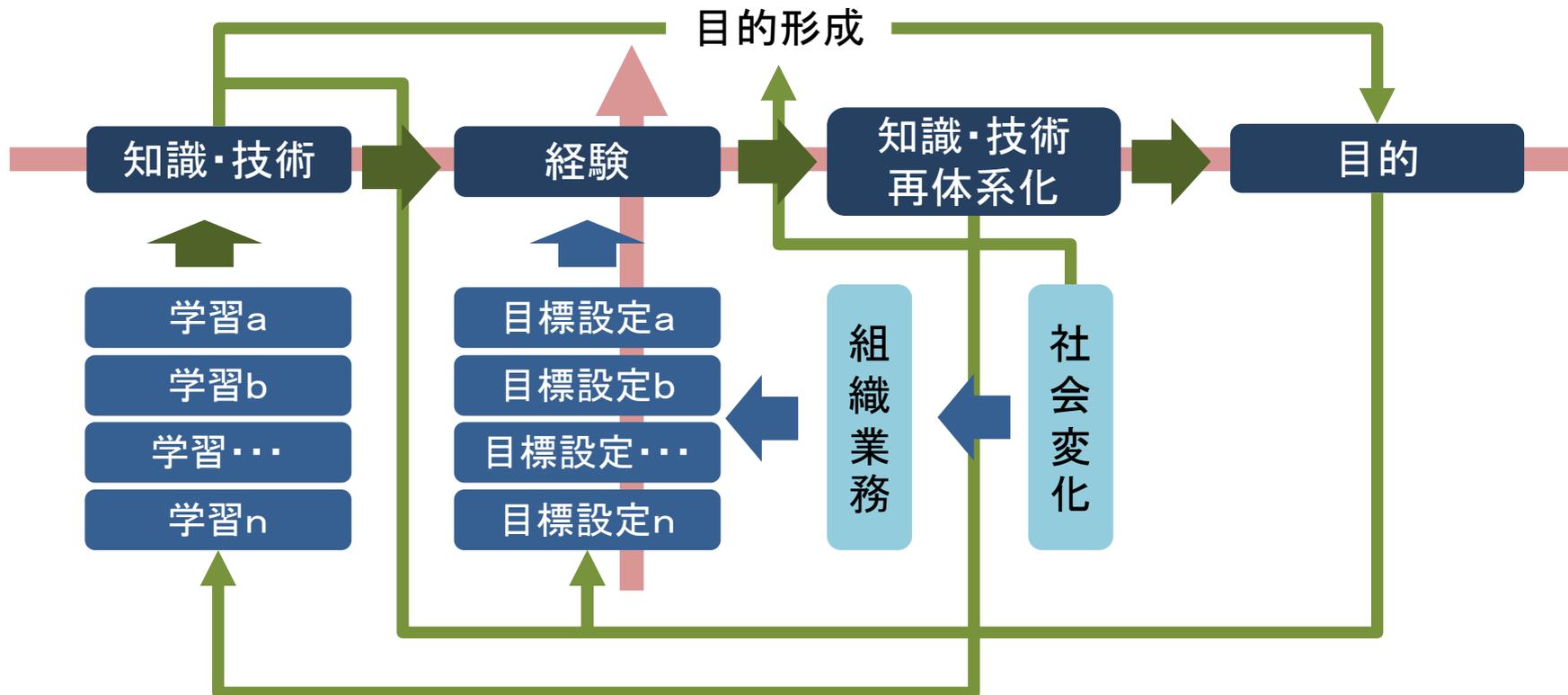
想定できないリスクが広がる。

自らの資産を有効活用できる分野、商品、市場を探す。そこで、リーダーシップがとれるかを検証する。

変革行動の結果、リスクを最小にする条件、方法を確認しておく。冒険をしてはならない。

目的形成と目標設定

仕事における目標設定と目的形成は常にクロスする。仕事からみる目標設定は必然になるが、目的形成と重なるところがなければならない。如何なる道具(知識・技術)を使って、如何なる方法で、如何なる成果をあげるかを表現しようとする。



目標設定は次々に現れる。学習すべき分野が1つに固定されるはずがない。専門分野とは別の目的形成のための知識・技術が必要になる。

➡ と ➡ の流れが一致なくなると価値観がズれてくる。

すべての行動は生産に向かう

すべての行動は生産行動に向かう。
生産結果から社会とのギャップや適合性を知り、最適化へと進む。

